
雪

兼明レテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪

【コード】

N0753J

【作者名】

兼明レテ

【あらすじ】

窓から見える白。降るのもまた白。雪国ならではの私小説です。

(前書き)

雪が降ってきたので、ふとした思いつきで書きました。

「雪、降ってるじゃないですか。寒いですよ、外」

窓の外は所謂銀世界だ。

向かいの家の真つ赤だった屋根も、分厚い雪の層に覆い隠されていた。まるでぐれたかのように、層を成している雪の端が自重で落下した。それが落ちる先もまた雪だ。白である。白に白が重なっても、それ以上白くなることはないというのに。

灰色の空もまた、細かな白が穴を穿つ。しんしんと雪が降りしきっているのだ。

部屋の中は温かいが、外が同じとは限らない。大抵の人間は室内の温度に騙されて外もそれほど寒くないと思いきむのだ。暖房のおかげで暑いくらいの室内と、純白の世界では天と地の差があるというのに。

ほら、薄着で出てしまったがために肩をすくめているおばさんが見える。

「あの人、寒そうですね。薄着ですもんねえ。雪降ってるんだから寒いのは当然なのに」

「そうだね。風邪を引いてしまおうね」

「でも羨ましいなあ。僕も心ゆくままに雪の中を転げ回りたいんですよ」

私は子供じみた独白に苦笑いを浮かべた。

しかし、確かにふわふわの雪の中に体を埋めてみたいとは思う。幼い頃は近くの公園でよく遊んだものだ。まっさらな雪原に飛び込んで顔中を真っ白にして、しまいには凍傷を起こしてしまうのだ。しかし私たちはそんなこと気にも留めなかった。騒ぐだけ騒いで雪を腹一杯に楽しんだあの頃が懐かしい。

窓の外ではスノーカーで外出してしまったお兄ちゃんが転倒しているのが見えた。

近所のちよつとおつかないお兄ちゃんだ。彼はズボンについた雪を恥ずかしそうにほろろと、足早に立ち去っていく。

「あのお兄ちゃん、いつもおつかないのに、転ぶときは転ぶんですねえ」

「仕方がないよ、スニーカーだもの。さすがに滑るよ」

「ですよねえ」

先ほどまでちらつく程度だった雪は、いつしか本降りとなっていた。

恐らく、まだまだ積もるだろう。カーテンを閉めてしばらくしてから開ければ、外は笑ってしまうくらい綺麗な風景と化しているに違いない。ただ、あまりに積もるのも困りものなのだ。雪かきが必要になるから。

「外出たいですよ」

「だーめだめ。凄く降ってきたから、外は出れないよ」

「むう。せつかく雪なのに」

私は軽く笑い飛ばすと、再度窓に視線を向けた。

もうこうなってしまうては何が何だか分からない。塗りつぶしたキャンバスのように真っ白である。いや、キャンバスならば塗りつぶさなくとも白か。往來する人も確認できず、私は店じまいとでも言うようにカーテンを閉めた。

次にこのカーテンが開くときは、箱からハトが飛び出すかのようなマジックが外を埋め尽くしている時だろう。それまで蓋は開けないで置こう。途中で覗くのはつまらないから。

私はソファから立ち上がるとふあ、とあくびをした。

「さーて、紅茶でも煎れるかなー。それもいいですね。……つてああ、続けて言っちゃった」

私は今まで腰掛けていた場所を振り返る。

そこには勝手に話し相手へと仕立て上げていた犬が、情けない顔つきで私を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753j/>

雪

2010年10月21日21時26分発行